

2012年3月10日  
東北学院中学校・高等学校礼拝堂

## 東日本大震災逝去者追悼礼拝

司式 宗教主任 松井浩樹  
奏楽 教 諭 鈴木雅光

讃美歌 312番  
聖書 コリントの信徒への手紙Ⅰ 15：42-49  
頌 栄 541番

明日で、震災から1年を迎えます。本校においても、進路も決まっていた卒業したばかりの高校3年生が2名、山元町で亡くなりました。また、4月から入学予定であった石巻の小学6年生、亘理町の中学3年生もその犠牲となりました。また、中学3年で転校したかつての級友も牡鹿半島で亡くなりました。この5名のほか、現在で死者・行方不明者はおよそ2万人といわれる、まさに大震災でありました。亡くなった人はもちろんのこと、この2万人の背後には家族や友人、知人、たくさんの人々が関わっていたはずであります。ですから亡くなった2万人からその背後にある4万人、8万人、12万人と悲しみの連鎖は途方もなく広がりを見せるのです。また、原発事故も大きな影を落として改めて、大震災といわれるほどの深さ、広さ、深さ、期間の長さを思い知らされるところであります。

さて、我々は亡くなった人々を覚えて、追悼の礼拝をささげています。そもそも、なぜ亡くなったのでしょうか。なぜ、その人であったのでしょうか。逆に今、生きている私たちは、なぜ生きていられるのでしょうか。というような根本的な問いをもつものであります。この問いは、私たち人間の持つ答えの出ない、永遠なる問いであります。最も古い問いであり、そして今まさにこうして、私たちの目の前に、最も新しい問いとして問われるのであります。

そこで、聖書が語る人間理解です。今日の48節に「土からできたもの」とあります。つまり聖書が語る場所の私たち人間の基本的理解は、土からできた如く「はかなく、もろい」存在であるということであるのです。そして、確かに今私たちは生きていますが、生まれたからにはやがていつか、私たちももれることなく死を迎える存在であるということです。ではなぜ、死ななければならぬのでしょうか。答えは一つだけあります。それは、神ではないからであります。不完全な人間、土からできたものといわれるゆえんであります。

それでは、私たちはただ単に、与えられた寿命を消化するだけに歩んでいるのでしょうか。そうではありません。今日の聖書は、同時に「天に属するその人の姿にもなる」と言うことを記しているのです。キリストも十字架死を経験しました。私たちはその圧倒的な力の前に、たちつくしかありません。言いようもない無力感と、虚無に支配されます。しかし、確かにその悲しさ、むなしさは残りますが、それを乗り越える形で聖書は、キリストの復活を語るのです。そしてなお、今も生きて私たちと共におられるという、究極のなぐさめと希望を語るのです。その希望に向かって人は生きることが許されているのではないか、ということ、パウロはコリントの教会の人々に語りかけているのです。

震災から1年です。私たちも程度の差はあれ、それぞれ通常とは違う一年を過ごしてきました。では、「今」私たちはどのように生きていますでしょうか。普通に考えるならば、若くて希望に満ちている、余命60年以上の前途洋々のみなさんです。希望に向かって生きることが十分にできるし、またこれからの復興のために最前線に立ち向かう、そのための大切な準備期間を生きているのが皆さんであります。その準備期間ゆえに、私たちは日々、礼拝をささげ、学びを深め、人格形成にいそしみ、限りある生だからこそ、精いっぱい生きる大いなる使命を帯びているのであります。

つまり、私たち人間は、限りがあるという有限性をもっている。そして同時に、有限であるけれども、意味のある命を与えられている有意味性をも兼ね備えている、それが私たちであります。震災の現実を受け止め、それを乗り越える祝福を信じて、共に今の時を歩んでまいりたいと願うのです。

それでは、逝去者追悼の、黙祷をささげたいと思います。全員起立してください。黙祷。  
そのまま祈りをささげます。

主なる神、礼拝のひと時、心を一つに我々は祈りをささげます。ここに集う一人一人、震災からの一年を過ごしてまいりました。そして今、特に逝去された方々を覚え、礼拝をささげました。その残されたご遺族を省みて下さいますように。悲しみを突き抜ける、主の慰めと、守りで満たして下さいますように。

有限性と有意味性をもち合わせる私たち、どうか与えられた今の豊かな時を、心して歩み続けますよう、一人一人を祝福して下さい。

この祈りを主の御名によって祈ります。アーメン